釈放された罪人

細井 茂徳

今朝の聖書箇所、ここには私たちは神の御子イエス・キリストの命と引き換えに自由の身になった一人の男が出てきます。バラバという人物です。彼の人となりについては、聖書はごく限られた情報しか与えていません。１９節で、彼は「都に起こった暴動と殺人のかどで投獄されていた」と紹介されています。人々を扇動して暴動を起こし、人殺しをした犯罪人なのです。しかしその僅かな情報からでも、多くの想像をかき立てられます。作家ラーゲルクヴィストが『バラバ』という小説を書いたほどです。

バラバは牢獄の中で、もはや極刑は免れ得ないと覚悟を決めていたことでしょう。ところがそんな彼のもとに全く思いがけない仕方で赦免と釈放の知らせが届けられるのです。一体何が起こったのかもわからないまま釈放された彼は牢から連れ出され、久しぶりの外の世界の空気を吸ったことでしょう。そしてこの日、自分が自由の身となったのは、民衆たちが自分の釈放を願ったからで、その代わりにイエスが十字架の死に至ることになったと知るのです。群衆の叫びの背後でひっそりと解放されていくバラバの傍らで、正にその彼とすれ違うようにしてイエスは繋がれて人々の嘲りと怒号の中を十字架を背負ってゴルゴタの丘へと進んでいくのです。

このバラバという人物を見ると、多くの方は「自分とはまったく無関係な人」と思われるでしょう。しかし古来より、キリスト者は《このバラバこそ私のことだ》と自分と重ね合わせてきたのです。このバラバと主イエスの入れ違っていく姿から何を受け取ることができるでしょうか。それは、バラバとは主イエスの十字架と引き替えに赦免された人、主の命と引き替えに生き延びた人であるということです。主イエスの十字架によって代わりに赦しを得、その命と引き替えに解放されたバラバの姿の中に、私たちキリスト者の姿そのものを見ることができるのです。